

---

$$1 + 1 = 1$$

そらのはて

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

1 + 1 = 1

### 【Nコード】

N7107B

### 【作者名】

そらのはて

### 【あらすじ】

オレはお前で、お前はオレだった。

夏でジメジメした教室に

「あちいな」

つと言つぶやく。

半袖の白シャツが汗でぐっしよりになる。

8時前の教室にはまだ誰もいない。

まあ、こんな朝早くから教室にいる奴はたいてい変わり者が真面目君に生徒指導を受けている不良ぐらいだ。

じゃあ、朝早く来ているオレは変わり者ってか。

教室には鳩の鳴き声の静寂に響き渡っていた。

「浅見おまえ朝早いって変わってるな」

教室の後ろに座っている浅見という女に話し掛ける。

「あんたほどじゃないけどね」

こいつはすこぶる朝の機嫌が悪い。

見た目はギャルっぽい不良。

ミニスリに眉剃り。

「なんで朝早いんだ？」

浅見はため息をつき、　オレの目に散らかせるように自分の右手を見せた。

ふと手の甲を見ると青くなっている。なんで朝早く来てるのかは一目瞭然だった。

もっと女の子らしくすればいいのに。

「マジ、一年下にガンつけてくる奴がいたからちよっとしよっぴいただけなんだけどねえ」

「ふん」

オレはそれだけの会話を終わらせ自分の席に着き机に頭を伏せた。

浅見と初めて出会ったのは・・・そうだなあ、お互いに物心が付いたときには既にそばにいた。

あの頃は家が近くて知らない間に仲が良くなっていた。学校から帰るとよく遊びに行った気がする。

今となれば友達関係とかで男、女二人で遊ぶとかありえない事だけど。

それにしても変わったなアイツ。  
ギャルに不良か。

絶対、怖くて男とか寄り付かないだろうな。  
・・・ってオレも男か。

昔からの付き合いだから怖くはないんだよな。  
幼なじみ、そんな言葉で片付けられないよな。

浅見とオレは二人で一人だった。

浅見はオレの半身であり  
オレは浅見の半身だった。

初体験は中3だったかなあ。

浅見が

「ね、あたしたちってこれからこんな感じなのかな？」

浅見は無言のままオレの体に体重を預ける。

オレは浅見の髪の中に静かに顔をうずめた。言葉にせずともお互いに何をするとか何を求めるとか分かっていた。

二人は元々一人だった。

そして二人には甘く切ない恋というのはなかった。  
ただ当たり前かのように一緒にになっていた。

「あんたいつまで寝てんの？」

目を開けると浅見の顔が見えた。

どうやら、朝からずっと眠っていたらしい。記憶が曖昧だ。

「朝早く来ても意味ないんじゃないの？」

浅見は前の机に尻をついたまま目を覚ましたばりのオレを見下ろす。

「今、何時間目？」

「昼休み」

「すげえな。先生とかよく起こしにこなかったな」

浅見が呆れたように言う。

「全部移動教室だったからね」

「そっかあにしても腹減ったな。飯どうしょっかな」

「あんた、のんきだね。それより体調とか大丈夫？」

「ん、いやそんな事はないけど。」

・・・嘘をついた。

実際には、最近体調が悪い。

何故か急に眠気が来て、まるでオレが消えそうになる。

いつもなら一緒になる時ぐらいなのに最近は思い出すだけで・・・

。

「ねえ昔の事思いだしてたの？」

「ああ、よく分かったな」

「もう思いださないで。なんかイヤな予感がする」

「分かってる」

「じゃないと・・・アンタ」

浅見が真剣な眼差しでこちらを見る。

見せられる。

「分かってる。分かっているから口に出さないでくれ。出したらもつとなりそんな気がする」

自分で言った事に怖くて浅見の鋭い視線をそらした。

「・・・」

浅見は何事もなかったかのように席に座った。

まただ、浅見とオレと想ってる事がわかり合えてしまう。

これが彼氏彼女とかなら、まだしもオレ達はそんな関係じゃない。二人が一人。

オレは浅見の半身であり、浅見はオレの半身。

「私、なんか雅史が消えそうな気がする」

そんな事を言ったのはいつの日以来だろ。

それからだ。オレの体に違和感を感じ始めた。

「ねえ、しよ」

曇った浅見の声。

いつものように身体を重ねた。

だが急に

オレはここから消えてしまうという錯覚に捕われた。いや、そうなるうとしたかもしれない。

「ちよっ！コレ以上はダメ・・・！」

浅見もそれが分かったらしく。

「なんか雅史が私の中に吸い込もうとした」

そんなことを口走った。

乱れた服を整えそして

「やっぱり終わらせよう・・・この関係を」

「じゃないと、あたし耐えられない。雅史が、雅史が消えそうで」

「浅見・・・」

オレの渴いた声がでる。

「お願い・・・・・・・・」

そう言った途端、浅見の目から涙がとめどなくながれた。

それから一ヶ月、二ヶ月と過ぎ  
半年、そして一年。

オレ達は一言も言葉を交わさなくなった。

そして、オレと浅見の関係は終わりを告げたかと思った。



だが、その終わりはまだ終わらなかった。

二人の関係はそこで終わらなかった。

「ねえまた始めみたいの」

約一年ぶりの会話。

あの屋上の上に呼びだされた。

夕日が眩しく茜色に光る。

浅見から話し掛けてきた。 伏せ目だった浅見がオレのことを直視する。

「あの時みたくじゃなく友達でいいの。 あんな触れ合いはもう・・・  
イイ。 だからお願い」

「ああ」

終わらせようとしても終わらない関係。  
見えない何かが二人を一人にしようとしていた。

そして、今もまた放課後に呼び出された。

あの屋上の上。 夕日が眩しく茜色に光る。

「ねえ覚えている。 あの時の事？」

「ああ」

「わたし・・・あなたのそばにいたいのに」

浅見がしゃくり上げた。

不良には似合わない涙を流していた。

そうだ、あの時からだ。

浅見は変わろうとしていた。　オレの事を嫌いになろうとしていた。

でも、出来なかった。

見えない何かが二人を一人にしようとしているから。

オレは浅見の髪の毛にそつと髪を埋めた。

「浅見・・・」

「違うの雅史。私ひとつになりたいんじゃない。一緒にいたいだけなんだよ」

「そうじゃないだろ。分かってんだぜ。オレは浅見の半身であり浅見はオレの半身なんだ。だから・・・」

「雅史だめ！消えちゃう」

「大丈夫だ。心配するな」

「本当に？」

だが答えとは裏腹に

二人が一人、オレ達がひとつになっていくのを感じられた。

オレが浅見の中に溶けていく。

温もりに埋没していくかのように。

消えていく中浅見の声が聞こえた。

「雅史！待つて雅史！お願いだから。ねえ！」

オレの意識はだんだんと遠ざかり浅見の叫び声だけが聞こえた。

「雅史、一緒にいるっていったじゃない」

ごめんな、浅見。

そして、さよならだ。

意識はそこで途絶えた。

それから三ヶ月

今日も放課後の屋上に来てあの茜色の夕日を見て私はアイツの事を  
思い出す。

まるで、夢のような出来事だった。

アイツが私。

私がアイツ。

今でもアイツは私の中にいる。

ねえ、アンタはこんな結末でよかったの？

別にいいんじゃないの

オレはお前でお前はオレだから

そんな声がどこからともなく聞こえた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7107b/>

---

1 + 1 = 1

2010年10月15日21時22分発行